

領域名：別科助産専攻

報告者：前田 すぎの

教育及び実践の課題

本科の学生は、看護師経験者と未経験者がほぼ半々の数で構成され、また年齢の幅もある。12週間の助産実習では、複数配置の場合、学生の性格的な相性と同時に臨床経験のある学生と未経験の学生が混在するように配慮している。これは、臨床未経験の学生が臨床経験のある学生のもと社会的マナーを学び、スタッフとのコミュニケーション能力を養い、実習を円滑に進めることができるようにという期待がある。しかし、これまでその効果を確認したことはない。

活用した論文の概要

本研究は臨床実習の期間、看護学生に生じるストレスに対するピア・メンタリング・プログラムの効果の検証が目的である。3年生の看護学生49人(実験群がn=17, 対照群がn=32)が登録され、大学入学前に内科-外科での経験がある学生の中からメンターを採用した。看護学生に対しては質問票を用い、6点知覚ストレス尺度によってストレス・レベルを評価した。その結果、臨床実習前後の看護学生のストレスレベルと、ピア・メンタリングがメンターとメンティの双方にとってさまざまな利点と欠点があることが確認できた。ピア・メンタリングは学術的知識が質量ともに増えるので、学生の思考プロセスを深化させる。ただ、本研究ではメンターとメンティになった学生をサポートして励ますためには、経験のある臨床指導者が必要であることが示唆された。

教育及び実践への活用

そもそも助産実習は、受け持ち対象に直接関わり、思考・技術レベルを上達させる目的があるため、助産学生のストレスはたいへん高い。そこにおいて、同じ目標をもつ学生同士にメンター・メンティの役割を求めるのは難しいだろう。臨床経験がある学生は、その経験が役に立つこともあるだろうが、それまでのレベルを問われるという緊張感のためか、消極的だと感じることもある。しかし、学生ピアにとってそれは必ずしもマイナス因子ではない。これまで本科では、経験や年齢差に関係なくそれぞれをサポートし合う場面を確認している。ペアまたはグループの成長した成立は、学生同士の対等の関係であるという自覚からで、それは経験差を頼るものではないと考える。得られた知見と課題をまとめると、1.本科は学生のピアサポート体制が行われており、効果は確認されている。2.教員の役割は、ピアサポートではできない支援を適宜に関わることである。3.実習施設へピアサポート体制とその効果を示し、複数学生配置に理解を得るよう働きかける必要がある。

本年度も各実習施設へピアサポート体制とその効果について説明し、複数学生配置への協力を依頼した。しかし、分娩件数の減少やハイリスク分娩の増加などで複数学生配置ができない施設もあったため、今後は新たな実習施設の開拓も視野に入れる必要がある。また実習期間中、学生同士サポートし合う場面が見られたが、教員の精神的支援が必要になる学生が前年度よりも増えた。間違えたくない、傷つきたくないという理由で、問題解決のための討議ができない場面も見られたことから、ピアサポートの前提にあるコミュニケーションについて課題があると考えた。

参考文献

Li H-C., Wang L.S., Lin Y-H. & Lee I. (2011). The effect of a peer-mentoring strategy on student nurse stress reduction in clinical practice. *International nursing Review* , 58, 203-210.
